

# 孫に語る歴史

## 第2章 文明のはじまり

谷川 修



## 第2章 文明のはじまり

### 2.1 生活と社会と文化のはじまり

はたしておじいさんに、人間たちの歴史が語れるだろうか。歴史の史という漢字は、文字による記録を意味していた。ここまで歴史を、宇宙や生物がどのようにして今に至ったかというような、自然史にまで広げて話してきた。自然科学が直接に関係することについては、かなり確実なことが言われているから、おじいさんなりに話せたのだ。それでも、話は推測をまじえるものになった。人類の初めの時代は、記録のない先史時代で、それを物語るのはなかなかむづかしい。

じつは歴史時代になっても、書かれた歴史がどれだけ本当か、そうはっきりとは言えない。記録を残した人たちが、自分たちの正統性を主張するために、色づけしたのかもしれない。その上、人間のできごとの説明はいつも不十分にしかできない。歴史家にできることは、一つの物語に解釈して語ることだ、と言う人もいるくらいだ。それでも、よく語られた歴史は、人間に多くの知恵をさずけてくれる。そういう歴史の入口へ案内するために、歴史家でもないおじいさんが話そうとしている。

### 人類の旅

考古学や人類学が、残された人骨や遺物をこまかく調

べて比較し、人類の古い歴史を探り出そうとしてきた。人類が世界各地にいつごろ住み始めたか、遺伝的なあるいは文化的なつながりはどうか、全体としてつじつまの合う説明がまとまりつつある。研究が進めば、さらに整理されていくだろう。

チンパンジーなどと枝分かれしたヒト属は、アフリカに出現したと考えられている。そのヒト属初期の原人や少し進歩したところのある旧人は、世界各地に痕跡を残しているから、アフリカから出て世界へ広がって行ったのだろう。ところが、現代の世界各地の人々をミトコンドリアDNAで比較すると、最も古い系統のDNAをもつのはアフリカに住む人々だ、という結果が出た。そこで、現代人につながる新人はもう一度アフリカから旅に出て世界各地に広がった、という説が出されている。

新人類が最初どこに現われたかを問わないとして、ともかく新人のものらしい遺跡が、アフリカ・アジア・ヨーロッパで見つかる。しかも、新人が出現した地域に、まだ旧人が住んでいたことを示す遺跡の残っているところがある。しかし、その後旧人たちの遺跡は消えていくので、旧人は絶滅したと考える説が有力だ。もし新人が遺伝的に旧人と大きく違うなら、世界各地で新人が同時期に出現したと考えるのは不自然だ。新人はやはりアフリカに現われた、という説が有力になる。

新人類が出現して世界各地に広がった時代、およそ7

万年前から1万5千年前頃まで、地球はたいへん寒い氷河期にあって、海面が今よりうんと下がっていたことを頭に入れておかなければならない。東南アジアからニューギニア島、オーストラリア亜大陸へは、海面が下がったせいで、歩いて渡れた。氷河期に日本列島へ来た最初の人々も、歩いて渡ってきたのだ。現在の中国北部にいた人々は、氷河期の非常に寒いシベリアへも進出したようだ。寒い環境にふさわしい身体的な特徴をもつ人々が、東アジアにいる。

その中から、今ではベーリング海峡になっているところを、シベリアからアラスカへ移動した人々があった。すでに海面がずいぶん上昇したけれど、まだかろうじて渡れる最後の時期に通過したのだと考えられている。北アメリカ大陸に渡った彼らは、遅くとも1万年よりも前に、南アメリカ大陸の南のはてまで達したようだ。人のいた痕跡が残されているそう。

こうして、氷河期が終わってしばらくすると、わたしたち人類は地球上の全大陸へ広がっていた。アメリカの遺跡は、暮らし方がまだあまり進んでいない状態から始まったことを教える。氷河期の終わる頃まで、ユーラシア大陸の人々の暮らしぶりもそれほど進んだものではなかった、ということになるだろう。

のちに、暮らし方の進んだ人々が、東アジアから海に出てニューギニア島沖の島々へ渡り、さらに島伝いに東経180度あたりまで広がった。船を乗りこなすようにな

ってからのことである。それらの人々の移住を示す遺跡は、3千年前にさかのぼれるようだ。今でも彼らの使う船は、小舟に平行して丸太か別の小舟を並べ、腕木を伸ばしてつないだものだ。転覆しにくくて広大な海を航海できる。陸地があるのかどうかも分からない水平線のかなたへ、何百 km も航海したのだ。およそ 1600 年前までに、ついには絶海のはて、北太平洋のハワイ諸島、南太平洋の東の島々まで達した。

人類の旅の話の聞くとびっくりする。でも、かしこいサルの子の仲間オランウータン(森の人)はインドネシア諸島にいるし、寒がりのサルで雪深い北の青森県にまで至った者がいる。鳥や植物も絶海の孤島に見つかる。生き物とは、生きていける場所ならどこへでも移動しようとする者なのだろう。人だけが旅をするのではない。

### 人類の歴史の舞台



## 暮らしの発明

人類は、氷河期の終わる頃まで、狩猟と採集をして生きていた。ところが、のちに太平洋の島々へ旅をした人々は、その船に土器を積んでいた。タロイモを栽培し、犬・豚・鶏を飼い、魚をとる道具を作り、植物を材料に布を織ることもできた。人間だけができる生活をするようになっていたのだ。

では人類は、いつごろ、どこで、そういう生活を創りだしたのだろうか。それは、生活の遺物を探しだして、考古学的なやり方で調べるしかない。植物で作った道具はたいてい腐って無くなるから、石器が一番くわしく調べられている。ヒトが出現して以来、石を打ち割って鋭い刃のある石器をつくり、それを使用する時代が200万年も続いた。旧石器時代という。新しい型の磨いた石器を使用するようになったのは、おおよそ1万年前からだ。これを新石器時代という。その頃から、人間の暮らしぶりが大きく変わった\*)。

新石器時代になると、人間が野生の穀物を食べ始めた。その成長を観察し、植物が種から成長することを知る。そこで、人の手で育てることを試み、栽培するようになる。果樹や野菜も育てるようになるだろう。手なずける

---

\*) これ以後のできごとは、しだいに年代をはっきり言うことができるので、世界に通用する西暦を使うことにする。約2千年前に紀元1年があるので、それ以前を紀元前何年と言おう。

ことのできる野生の動物を飼うようにもなった。採集と狩猟の生活が、人間の身近でできるようになったわけだ。作物も家畜も、代々好ましいものを選んでいけば進化が進み、品種の改良ができる。他方で、入れものや煮炊きの道具としての土器をはじめ、多くの道具を発明して、役立つものを作り、使用することも進んだ。この生活の変化こそ、まさしく革命と言える。始めた人や発明した人たちの名前は、残念なことに分かっていない。

日本猿の研究でおもしろいことが知られている。海辺の群れにイモを与えていたところ、若い猿が海水で洗って食べることを始めた。彼の名は分かっている。泥を落とせし、塩がついておいしいのだろう。同じ世代の猿たちがまねをし、さらに群れ全体に広まった。しかも、生まれてくる子猿もまねができる。サル社会でも、文化的な行動が代々伝わることを教える。もちろん人間は、農業生活を始めたら、それを広めることができたのだ。

作物は、栽培のあいだ見ていなければいけない。農業を主な仕事とする人々を、定まった場所に住むようにする。望むなら、種を持ってよその土地へ移動することもできる。遠くの人にあげることもできる。穀物がよく育たないところでは、動物を飼うことに力を入れる。動物はいっしょに歩けるから、家畜の食べる草を求めて移動するのがよいだろう。川沿いや海辺では、魚や貝をつかまえる者も出る。そして、こういう生活をするのに必要な道具を、さらにいろいろ工夫するようになる。人間は、



好奇心いっぱいでもしたがるから、そういう活動がいっせいに花開くことになった。

青森県で三内丸山遺跡というのが見つかっている。日本列島で縄文式土器を作っていた時代の遺跡だ。栗を栽培したことが分かっているけれど、縄文時代の農業はそれほど進んでいたとも考えられない。しかしそこには、住居の跡、大きな建物を建てた柱の穴、貯蔵の穴、土を掘った墓などがみつかっている。道もあって、人々は村をつくって住んでいたのだ。だから、人間の生活は、上で想像したような図式通りに進んだのではない。本格的な農業を始める前に集落があって、かなり進んだ生活をしていた、と考えてよいのだろう。実際は、地域ごとにとっても異なる進み方をしたのだろう。

穀物を食べた最も古い遺跡が、西アジアで見つかっている。紀元前 8500 年前後、地中海に面する今のシリア\*)で始まったようだ。農業は、そのあたりから、北のアナトリア(今のトルコ)、東のメソポタミア(今のイラクとその周辺)、南のナイル川流域(今のエジプト)へ、広まっていった。この地域一帯で栽培されるようになった作物は、麦類や

---

\*) 「今の何々国」と言うのはわずらわしいので、今後はたいいていそうしない。しかし、地域を今の国名で呼ぶことは、本当は、昔起きたことを正確に話すのにふさわしくない。その国がなかった時代もあるし、時代が移ると、国の領域は広くなったり狭くなったりするし、外部から別の集団が入ってきたりする。

豆類などである。羊・ヤギ・豚・牛などを家畜にしていた。麦は、地中海性気候のこの地方で、雨の多い冬に育つ。鎌倉時代から日本で、夏に米を育て冬に麦を育てることができたのは、麦のその性質のおかげなのだ。

東アジアでは、長江流域で米の栽培が始まった。見つける稲のもみは、栽培したかはっきりしないところがあるが、紀元前 1 万年近くさかのぼれ、畑作と考えられている。最近見つかった水田耕作の跡は、紀元前 4-5 千年のものだ。もっと古いところが見つかるかもしれない。黄河流域では、紀元前 6 千年頃にはアワが栽培されていた。独自に豚の飼育を始めたらしい。鶏は東南アジアで飼い始めたようだ。太平洋に乗り出した人々がタロイモ・豚・鶏などを船に乗せていたことはすでに話した。

アメリカ大陸でも、独自に農業を開始した。君たちの好きなトウモロコシは、紀元前 5 千年には栽培されていたらしい。ポテトチップスをつくるジャガイモは南アメリカで栽培された。サツマイモ・トマト・トウガラシなどもみな、アメリカ大陸原産だ。コロンブス以後に、ほかの大陸でも食べるようになったのだよ。

今話したことは、人間たちが遠く離れた地域で独自に農業を始めた、ということを見せてくれる。人種によって能力に違いがあると思えるのは正しくない。人間たちは、それぞれの場所でよい食用植物を探し、やがて自分で育てるようになった。作物の種類が違うのは、その地域にそういうものしか見つからなかったからだ。家畜も、

その地域にいる動物のうち、飼いならしやすい種類を選んだのだ。アメリカ大陸の人たちが動物を飼おうとしたときには、馬がいなかった。昔のハリウッドの映画で、“インディアン”は馬に乗っているが、17世紀にやって来た“アメリカ人”が連れてきたのだ。

生活の革命は、地続きのユーラシア・アフリカ大陸と南北アメリカ大陸のそれぞれで、広まっていった。やがて先進的な地域では、それらの多くのことをできるようになる。

## 最初の社会と文化

狩猟採集の時代から大家族で暮らしていただろう、と推測している。農耕や家畜の飼育などの労働で生活するようになって、大家族は有利な暮らし方だったろう。いつからそうしていたかよく分からないが、中国で一族の同世代に兄弟のように順番をつけたのは、大家族で協力していた頃のなごりだろう。しかし、新しいスタイルで生活を始めた時期、家族のあり方は大きくゆらいだにちがいない。考古学では、出土する遺跡からその社会を類推することになる。三内丸山遺跡は、家々と村のあり方について、想像するヒントを与えてくれる。

それでも、初期の村を物語としてすっきりと語るのはむづかしいから、想像を働かせてみよう。よい場所に定住するようになったら、集落ができただろう。大家族の人数が増えて、血のつながりの濃いいくつかの家族が住む村があっただろう。一族が苗字を変えない中国では、

苗字の数がうんと少ない。一つの大きな村全員が同姓だということが最近まであった。一方で、血のつながりのない家族が、村に参加することも起きただろう。そういう由来の異なるいくつかの大小の家族が、集落に住んでいたと想像される。

結婚の縁組は、村の中であるいは別の村の人との二つの場合があるだろう。家族のつくり方には、母系と父系の両方が知られているので、家族の関係はややこしい。ところが農耕は、作物を育てる土地を家族と結びつける。しだいに一定のやり方で家族をつくるようになったのだろう。古くは、男性主体で狩りをし、女性が採集をしたとすれば、主に女性たちが農作業を受けもったとも考えられる。戦争をするようになって、男性の力が強くなり、父系の家族が成立したのだろうか。

日本列島では平安時代まで、結婚の初期に男性が女性の家へ通った。鎌倉時代まで、女性も財産を相続することがあった。その財産とは農地だから、昔の家族のあり方が残っていたのだろう。

縁組をとり結び、さまざまな交流のある近くの村々は、かなりのつながりをもつことになる。いくつかの村々は、内部で関係が深く、外部に対して多かれ少なかれ共通の利害をもつ。こうして、家族、村、小地域と、段階的な社会が出来上がる。共同体と言い換えることができるだろう。血縁と地縁とで結びついている。

農業が発展して食べるものが増え、人口が増加すると、

社会は変化していっただろう。大家族の中で、そして村の中で、重要な役割を果たす人が出て、しだいに力をもつようになる。先祖を最も古くさかのぼれるような一族や、一族の中でも古い家柄の長老が、そういう指導者の役割を果たす。家々のあいだに格差が生じ、社会の構造ができていく。それは人間に特有の社会である。アリやミツバチとは違って、遺伝子に埋めこまれているのではない。人間の社会は、ヒトの性質に基づきながら、試行錯誤してつくり上げられたのだ。現代まで人間社会は、血の流れる試行錯誤をくり返してきた。

昔は、血のつながりを大切に考え、その関係を何代もさかのぼることができた。同族が別の村に住むようになるのちの代になっても、一族のつながりは意識された。同族的な集団は氏族と呼ばれ、社会の中で力をもっていた。たとえば、のちに奈良県で、そういう有力な氏族が連合して支配する国をつくった。国以前の状態を別の言葉で表現すると、いくつもの氏族から成るいくつかの部族ということなのだろう。古代ギリシアの都市国家アテネは、四つの部族が連合してできた。

農耕社会ができ始めた頃、地形でおおよそ区切られるそれぞれの地域には、いくつもの氏族やいくつかの部族が競争しながら暮らしていた、ということになるだろう。

家族はいっしょに生活する中で、文化と呼べるものをつくり出す。言葉のことを考えてみると、狩猟採集の時代にすでに、地域には、似た言葉を話し似た文化をもつ

人々がいただろう。ときたま外部から移動してくるグループがあっても、年代を経ると同じような状況になる。農業による定住生活は、大きな変化をひき起こす。村々や部族の習慣がしだいに固まり、人々の考え方に共通のものが生まれる。地域に特有な文化が生まれただろう。社会の習慣や文化は、できごとの起き方に大きな影響を与える。だが、おじいさんに文化を語る力はない。

言っておく必要のあることがもう一つある。鬼神を語るのには孔子の教えにそむくけれど、人間には宗教と信仰があるということだ。人間の歴史に深くかかわっている。目立つ山や、大きな岩や、泉や、大きな木などには精霊が宿っている、という精霊信仰があった。農業を営むようになってからも、そういう心持は続いて、作物の生育に欠かせない太陽への信仰があった。そして、“知恵ある人”は、生と死について考える。

20世紀まで、南アメリカなどの奥地に、まわりの社会からほとんど切り離された村々が残っていた。社会(文化)人類学を学ぶ人たちが、ずいぶん古い生活法で暮らしていたその人々を観察して、人間と人間の社会や文化とを研究している。それらの研究は、初期の社会と似た人間社会を考えているのだけれど、おじいさんはそれを語るほど知らない。大人になったら、読んでほしい。

## 2.2 文明社会のはじまり

### 古代文明

古代の文明として四つのものが有名だ。チグリス川とユーフラテス川の流れるメソポタミアで、紀元前 3100 年頃に、都市国家できた。アフリカのナイル川流域では、紀元前 3500 年頃、都市国家からもっと広い地域を治める国家に進み、紀元前 3000 年以前に統一された国家が生まれた。インド亜大陸のインダス川とその周辺では、紀元前 2600 年頃からの古代都市の遺跡が発見されている。東アジアの黄河と長江の流域でも、都市国家の遺跡は紀元前 3000 年以前にさかのぼれるようだ。

普通四つに加えられないけれど、今のメキシコ南部、北アメリカと南アメリカを結ぶ地域に文明が生まれた。年代はわずかに遅く紀元前 1200 年頃らしい。無人の大陸へ少数の人々が渡って生活を始めたのが、ほかの四つの地域と比べて二・三万年以上も遅いことを考えれば、やはり感心しないわけにはいかない。

人間たちはどのようにして文明を創り出したのだろうか。どういう段階をふんで進んだかは、遺跡の研究から知られている。でも、歴史の教科書は、農耕が始まってからの五千年のことに少しふれるだけだ。おじいさんは、その長い年月の歴史を、人間たちがどんなことをしていたのかを、もっと知りたい。また、想像を働かせながら考えて、おじいさん流のおしゃべりをする。

生活が安定して人口が増えると、人間たちはさらにいろいろな活動をした。もう一度、暮らしぶりの発展を考えてみよう。農耕のために鍬(くわ)や鎌(かま)などの道具をつくり、田畑に水をやるために水路を掘って灌漑(かんがい)する。植物や羊の毛から糸をつむぎ、機織(はたおり)機を発明して、布を織る。かまどを築いて、食べ物を煮炊きし、石うすで穀物を粉にして、パンなどをつくる。土を使い、木をきって、さらにレンガを発明し、複雑な構造をもつ家を組み立てる。衣食住の基本ができ上がり、農業に基礎を置く人間の活動は、システムとして完成していく。ワットやエジソンが何百人もいたのだ。今数えあげた以外に、抜け落ちたものを考えてみてくれたまえ。

家畜を広く農耕や運送に使うようになったのは、文明が少し発展した段階なのだろう。犁(すき)をつくり牛で引かせるようになれば、穀物の生産量が増える。糸つむぎ機とろくろを発明し、車輪をもつ荷車を発明する(ついでに言うと、古代アメリカには車輪を発明するエジソンがいなかった)。船の帆が発明され、太平洋にも乗り出した。馬で引く荷車や船を使う輸送が加わる。メソポタミアやエジプトでは、紀元前 3500 年頃に、青銅を使用するようになった。鉄器を本格的に使うようになったのは、紀元前 1500 年頃。金属で農機具などをつくれれば、作業ははかどる。金偏のつく鍬や鎌と言う文字ができたのはそういう頃のことだ。木だけではなく、石を切りだし、レンガを焼いて、大きな建物を建造できるようになる。



文明は広がろうとする。中心地域のまわりで文明開化が進み、遠い中心域のあいだにも物と技術が行きかう。古代文明の発展した段階でつくられた都市の遺跡や、残っていた建造物や金属器などを見ると、驚くほどだ。少数の豊かな人々の暮らしは、現代人にとってもうらやましいほどだったろう。しかし、その発展によって、すでに環境問題が発生していた。かつて世界各地にあっただろう広い原生林の多くが失われて、今はもうない。

## 都市国家

都市国家ができるまでに起きた社会的なできごとは、もっと見えにくい。それでも、話してみよう。

氏族や村のあいだには競争があっただろう。20 世紀になって社会人類学者の観察した古い社会にも、戦いがあった。農業社会では、その原因に農地にかかわることが加わったと考えられる。大きな氏族のあいだや部族のあいだの争いは、戦争と呼べるようなものになっただろう。アテネのように部族が連合して大きな社会集団ができるまでには、さまざまなことがあったにちがいない。小さな氏族や部族が吸収されることもあっただろう。

同じギリシアのスパルタは、大きな集団が外部から侵入して、一つの地域を征服して都市国家を建てた。奈良地方にできた国で語られた伝承によれば、外部から部族が侵入して首長になった。現代の歴史家は、この伝承をフィクションだとして、あまり取り上げない。しかし伝承は、第一代と同じ部族の母親から生まれた兄ではなく、

その地域にもともといた部族出身の母親から生まれた子が 2 代目を継いだ、と語る。この話は、世界各地でのちの時代にあった王位の継承によく似ている。外部と内部の諸部族の連合として国がつくられたのだろう。最初の国々は、きっと、たくさんの物語ができるほど違ったやり方でできたのだ。

いくつかの部族の支配層や、そこでいろいろな役割を果たす人々が、一か所に住むようになる。農作業をする人々は、当然周囲の広い土地に住む。都市国家ができていくようすは、まわりに濠をめぐらせて木の柵で守った、環濠集落(かんごうしゅうらく)を思い浮かべればよいのだろう。たとえば、奈良県の纏向(まきむく)遺跡や、佐賀県の吉野ケ里遺跡だ。メソポタミアや中国では、都市の周囲に高い土の壁を築いた。石や焼いたレンガで囲まれるようになるのは、のちのことである。

おじいさんは、人の住む住宅がどのようにして今のようになったか、興味があるがよく知らない。吉野ケ里などの竪穴式住居にはかまどがあって、布でつくった衣服を着て住んでいただろう。都市国家ができたときには、住宅は、柱・はり・屋根・壁で組み立てて、基本的に今と同じものに近かったのだろう。鉄製ののこぎりや大工道具が発明されて、角材や板がつけられるようになれば、相当のものができただろう。机だってつくれる。

国と呼べる最も古い都市の遺跡が、メソポタミア南部

でいくつも見つかる。紀元前 3500 年頃、シュメール人が建てた。中心の都市の周囲に城壁をめぐらし、その外に農地と家畜のための牧場が広がっている。水路をひいて広い土地を耕作していた。都市に集まって住むということは、非農業的な仕事で暮らす人々がいたことを示している。いろいろな道具をつくる専門の職人や、すでに生産物の流通にたずさわる商人もいた。支配層がいて、まとまりのある政治体制があった。300 年も経つと、シュメール人は最古の文字を発明した。都市が発展して 500 年すると王が支配する国家になった。

血筋の古い氏族の長老たちは、また部族の長老ともなつて、政治的な決定に発言権をもっていただろう。戦争になれば、広い土地を占めて人口の多い氏族ほど、多くの戦士を出すことで発言権は増す。氏族の中でも、家柄が古く豊かな一族が、長老の座を占めることが固定化するようになったのだろう。こういう支配的な力をにぎったいくつもの一族たちが、都市国家の支配層になる。その政治体制が続くうちに、権力を自分一人に集める人物が現われて首長になる、という傾向が世界のどこにもあった。特に戦争の指揮をとる人は、しばらく大きな命令権をにぎるので、しばしば戦争をするような情勢では、とても大きな力をもつことになる。

前に名をあげたトゥキュディデスは、当時のギリシアを代表する二つの都市国家、アテネとスパルタとの長い戦争を記述した。アテネには、およそ 10 万人の市民と数

万の外国人がいたが、市民たちは市民の数に近いほどの奴隷(どれい)を使った。スパルタは、外部からの征服者として都市国家を建てた。少ない人数で、多数の先住民を国家に隷属させて生産に当たらせ、奴隷ではない近くの住民も支配していた。時代のずっと古いメソポタミアでも、都市国家が出来上がるまでに、敵対する部族を征服すると、それまで自由だった多くの人たちが奴隷にされたことだろう。語られない数多くの悲劇があった、と考えなければならない。

スパルタでは、有力市民層が政治の指導権をにぎる一方で、そこには王が二人いて、戦争のときにはどちらかが軍隊を指揮した。軍隊の指揮者が王になったという傾向を教えてくれる。しかし、ギリシアの都市国家の民主制は、それよりもはるかに昔のメソポタミアの都市国家のようすとは違うようだ。メソポタミアの歴史は、王の権力が強くなる方向へ進んだ。

都市国家は、それまでになかったほどの人口の社会を運営するために、組み立てられた組織をもっていた。最も上の支配層は、生活の費用を得るための労働をしなくてよい裕福な人々だった。その下に、それぞれの仕事を受けもつ役人がいた。市民の従わなければならない規則も決められた。政治のしくみは、変化を受けながらでき上がっていっただろう。その長い年月の変化は、先に話した生産の発展が続く中で、文化の変化とともに進んだのである。

都市にはすでに商人がいたことを話した。農業やそのほかの生産物が増え、人の集まる所で市が立つようになって、都市はいよいよ発展したのだ。支配層は、多くの農業生産物を市場に出し、商業の富を得ることに参加しただろう。商業は、都市のなくてはならない重要な要素だった。商人というと、中国の商王朝が思い浮かぶ。商王朝は、都市国家の支配者から出発しただろう。日本では殷(いん)と呼ぶけれど、現地中国での呼び名の商を採用しよう。歴史家は、都市の中での宮殿の配置や、朝にまつりごとをする朝廷という中国語が、市場をとり仕切る王のあり方に関係している、と考えている。

## 領域国家

どんな組織も、社会とその組織自身の変化につれて、そのしくみがよく働くときがあり、やがてうまく働かないようになるときがある。都市国家や国々は、平家物語の語るように、年月が経つうちに栄えたり衰えたりする。都市国家は初めの頃から、まわりの都市国家との競争の中で、栄枯盛衰の歴史をたどったのだと考えられる。競争はしばしば戦争になった。やがて、王が現われる。大きな都市国家ウルは、シュメール人たちの地域で最も強くなって覇権(はけん)をにぎり、王朝を建てた。

文明は、最初に都市国家のできた地域の外にも広く伝わった。しばしば、文明の中心にある人々は、周辺の地域に住む人々をバカにして野蛮と呼ぶ。それは、文化がかなり違い、生活習慣が違うことからくる感情である。

話す言葉を理解できないことが、最も大きな原因だ。ギリシア人は、異国人を言葉の聞きづらい人と呼んだそう。それが英語のバーバリアンの語源である。ギリシア人は、自分たちよりも進んだペルシア人もそう呼んだのだから、もっと冷静な判断をしていただろう。“野蛮”な周辺地域も発展すると、国を形づくり、ついには王が現われる。そういう国々は同じ程度の強さをもつ、と考えなければならない。歴史を通じて、大きな国はいつも周辺の国々に苦しめられた。

国を支配するようになった王は、もっと広い地域を支配したいという個人的な欲望によっても、ますますまわりの国々を征服しようとする。いつも緊張しなければならない状態がある。少し離れた国々もまきこんで、富国強兵(ふこくきょうへい)の競争がおこなわれ、機会があれば戦争する。書かれた歴史は、その物語で満ちている。

メソポタミアでは、シュメール人の多くの都市国家のあった領域よりも北に、今のシリアやトルコの一部も含むアッカドに王国ができた。その王が、シュメール人を征服し、メソポタミアまでを支配する大きな王国を建てた。紀元前 2300 年代中頃のことである。このように広い地域を支配する国を、都市国家と区別して、領域国家と呼ぶ。アッカド王国は約 200 年間続いたが、やがて解体し、諸国に分かれた時代が続く。

今度は、ユーフラテス川中流にあるバビロンを首都とするバビロン王国が、しだいに強大になって、メソポタ

ミア一帯を支配する領域国家になった。紀元前 1700 年代中頃のことである。その王が、教科書でもかならず名が出るハンムラビだ。ハンムラビの名を有名にしたのは、法律を刻んだ石碑である。この法典は、石碑とは別に粘土板にも刻まれ、王の名で王国の各地域に配布された、と考えられる。はじめに神々の中の最高神のことが書かれ、ハンムラビ王がその神から法典をさずかった、という図が添えられている。じつは、法律を定めることには前例があったことが、記録に残されている。政治的な改革は、しばしば前例にならいながら、さらに一歩を進めるというやり方で実行される。

ハンムラビ法典には、現代の法律にひき継がれている多くの条項が書かれている。社会生活上のほとんどのことが取り上げられているそうだと。裁判官など、訴訟についての制度があったことになる。中世以前の王国では、政治をつかさどる位の高い階層が裁判をする。もちろん、最高裁判官は王である。

君たちは何気なく聞いたかもしれないが、ハンムラビ法典は文字で書かれていた。世界で最初に文字記号を使いだしたシュメール人は、くさび形文字と呼ばれる一そろいの文字を完成した。とりひきの品物や数を記録できる。紀元前 3000 年頃までに、自分たちの話すことを文字で表わすことができるようになった。政府の命令を文書で送れるし、王のしたことを記録し長く残すことができる。くさび形文字はメソポタミア全域に広まり、変更さ

れながら、長く使われ続けた。バビロン王国でも使ったのだ。文字のアイディアはエジプトでも取り入れられて、独自の文字を使うようになった。

まだ荒野にいた頃から人は、太陽や月や夜空の星をながめていただろう。しだいに精確な観測になり、文明が発展すると暦もつくられた。バビロン王国が領土を広げると、メソポタミアで広く使われるようになった。太陰太陽暦(たいいんたいようれき)である。月の満ち欠けで1月を数え、春分から次の春分の日まで、太陽が往復する日にちで年を数える。七曜を名づけ、七日ごとの一週間を数えることも始めた。曜日に、太陽と月と夜空で目立つ五つの惑星の名がつけられているのを知っているね。

月の満ち欠けは30日足らずで起きるから、12か月では1年365日に足りない。だから太陰太陽暦では、ときどき、うるう月を加えて調節した。うるう月のある年は、1年に13か月ある。太陰太陽暦は中国に伝わり、日本でも江戸時代まで使っていた。農耕のための季節分けの工夫がつけ加えられている。たなばたの7月7日は、今の8月くらいで、空が晴れてよく星が見える季節なのだ。

ハンムラビ法典に神が登場するように、人間の行動に神をからめて考えることが、前の時代から続いてあった。シュメール人のウル王朝は、ピラミッド形の巨大な神殿を立てた。世界中の古代都市には神殿があったのだ。ずっとのちのものだが、アテネのアクロポリスにあるパルテノン神殿を思い浮かべるといいだろう。バビロン王国



でも、神殿を建てるなどの事業がおこなわれた。国家は、いけにえを捧げて、天の神々を祭る儀式をした。中国では、先祖の霊を祭ることも重要で、王家の先祖をまつる神殿もあった。戦争や国家の大事には、どこでも、神殿に祈りをささげるのである。

暦ができたことを話したが、王は時間を管理するという権威も自分のものにした。天体の動きを観測する官職があつて、王の名で暦を制定した。中国では、年号を制定し、時を告げる太鼓か鐘を大きな建物に置いた。琉球王朝時代の首里城が復元されているが、そこに時を測る水時計が置いてあるよ。王の権威づけの一つなのだ。

エジプトでは、メソポタミアよりも古く紀元前 3000 年頃には、領域国家ができていた。ペルシアに征服されるまで、おおよそ 2500 年間盛衰をくりかえし、26 代の王朝が入れ替わって治めた。外へ攻めて出たし、外から攻められて支配されたこともあった。エジプトには記録が多く残っていて、くわしく知られている。ピラミッドは、紀元前 2600 年中頃の第 3 王朝からつくられた。

ここでは、毎年、ナイル川の洪水によって、上流から肥えた土が運ばれる。それを利用して農業が発展した。ナイル川を手なずけて、水をうまく広い農地に行きわたらせることが、いちばん大事なことだった。きわめて多くの人々を使ってするその大事業が、エジプトの文明を特徴づけた。いち早く領域国家ができた理由も、そこにあるだろう。そういうところだからこそ、ピラミッドの

ような大工事が何度もできたのだ。大人数を統率する経験がつまれ、王の権威が強くて、大きな官僚の組織をもつ政治制度ができた。とくに神官が強い官職として組織され、その伝統は長く続いた。

古代エジプト人は、独自の文字を使用し、数々の発明をし、明治以後日本でも使うようになった太陽暦をつくった……。古代エジプト 2500 年間には、数多くの興味深いできごとがあったことだろう。しかし、話が長くなるのを避けるために、ここで打ち切ることにする。その文明の遺産は世界に伝わり、わたしたちの気づかないところに息づいているはずだ。

## 二三の視点

国家という中国語には、家という文字が含まれる。王の治める国家には、王が一家のあるじとして管理する家族のイメージがこめられている。氏族の長であった有力者には、自分の一族と使用人たち、氏族につらなり号令に従う人々と、その勢力に味方するほかの氏族の協力者があっただろう。有力者は、それらの人々を、家庭の延長のように統率する。有力者の一人が王になれば、そのやり方を国全体に広げる、というのがありそうなことである。政治は、王が家政を取りしきるようなやり方に変化することになる。単純化して言えば、どこでも王国の王は、国内の人々を家の長がするように、国の財産を自分の家の財産のようにあつかう傾向をもつ。

近代よりも前の王国は、この基本的な傾向の中で、支

配下にある者たちが自分たちの利益を得ることに努めて、国家の体制が変化する歴史をたどる。ところで、メソポタミアやエジプトよりも遅く発展したギリシアやローマの、民主制あるいは共和政は、その時代の例外であった。のちのヨーロッパは、アテネやローマをお手本としたことで、その遺産をひき継いだ、と言えるだろう。

わたしたちはしばしば人種という言葉を使う。しかし、人のもつ生物的な特徴をはっきり分ける線を、地図上に引くのはむづかしい。前に話したミトコンドリアDNAの比較は、世界各地に住む人々のおおよその系統を教えるけれども、それぞれの地域の人々がさまざまなDNAをもち、その特徴が地理的にゆるやかに変化していることを示すだけだ。遠く離れた日本人とヨーロッパ人の系統は近くないが、隣り合って暮らす人々を、人種で区別するのはあまり意味がない。長い歴史を見れば、人々は入り混じってきたのだ。他方で、言葉を比べると言語の系統樹をつくることができる。それによって、歴史上の人々の系統を、言語的に知ることはできる。

ハンガリー人を例にとって話してみよう。彼らは自分たちのことをマジャール人と呼ぶ。ウラル山脈あたりから出て、西暦1000年直前に、ハンガリー平原を征服して国を建てた。マジャール人はモンゴル系の血筋を濃く引いていた。しかし、現在ハンガリーに行っても、周辺の国の人たちと区別をつけることはむづかしい。君たちは、日本人の赤ちゃんのお尻がうすい青みを帯びているのを

知っているね。あれはモンゴル・東アジア系の証拠なのだ。ところが今のマジャール人の赤ちゃんで、お尻の青い子は数パーセントしかいないそうさ。マジャール語を話し、他国の人がハンガリー人と呼んでいる人たちの、人種をどう言えばいいかむつかしいだろう。

わたしたちは民族という言葉も使うけれど、上のことを考えれば、ハンガリー民族というのは、マジャール語を話す人々を意味しているにすぎない。その隣でユーゴスラビアという国を構成していた人々が、20 世紀末、民族に分かれて争った。地図を広げて見れば、あの小さな地域で血を流して戦うことに、疑問を感じないわけにいかないだろう。けれども人間は、言葉や宗教や文化の違いを軽視することができないから、民族の問題は解決できずに存在するのだ。ただ、民族と結びつけられる国家という考えは、近代に新しくなったものだ。それについては、近代のところでもた考えてみよう。

つけ加えると、日本語の系統は未だによく分からないとされているが、ミトコンドリアDNAは、当然ながらわたしたちが中国・朝鮮の人たちに近い、と教える。

まだまだ歴史を考えるのに大切な切り口があると思うけれど、今は、おじいさんの話の種も尽きた。